

科学技術課にやってくるレファレンスの中で、宇宙・航空や原子力資料に関する問い合わせに混じって、異彩を放つのが暦に関するものである。「去年は1回なのに、今年は何故2回も土用の丑の日があるのですか」「昔の人で、2月30日に生まれた人がいるんです。何かのまちがいでしょうか」など暦注の類や新旧両暦の対照に関するものが多い。明治6年の太陽暦への改暦以来すでに110年余。それでも、われわれは、旧暦に引きずられているところがある。「星」や「日」や「数」の回り合わせに、神秘を感じる。

アーサー・C・クラークは、「宇宙のオデッセイ 2001」(映画「2001年宇宙の旅」の原作)の前書きの中で、次の様な事を述べている。“時のあけぼの以来、一千億の人間が地球上に足跡を印した。銀河系に含まれる星の数は、奇妙な偶然だが一千億である。地上に生を受けた人間ひとりひとりのために、この宇宙では、星々が輝いているのである”

ところで、2001年は21世紀の始まる年なのだが、何故2000年ではないのかと、突然言われると答えに窮してしまう。数え方から言えば、西暦は1年から始まったので、21世紀の開始は、2001年としか言いようがない。

この問題は最近、NHKテレビの朝の連続テレビ小説「ロマンス」で、「1900年に20世紀を迎えた」とやって、朝日新聞の投書欄を賑した。しかし論理を無視し、歴史的に見れば、あながち誤りであると

は言えない。時のドイツ皇帝ウイルヘルムIIが、一方的に1900年をもって20世紀としたということが、同じ投書欄に出ている。その直後に受けたこの20世紀の開始年論争についてのレファレンスを調査するうち、当時の英国でこの問題が相当な社会的関心を呼んでいることがわかった。*The Times*の投書欄には、1899年から1900年にかけて、ドイツに従うべしとする人、数え方を理論的にとく人と様々な意見があったのである。英・独の軍拡競争など決して明かるい時代ではなかったはずなのに、投書の多様性から、市民がこの論争をけっこう楽しんでいたように、私には思える。新世紀に対する漠然とした期待感があったのであろうか。しかし現実はそのようではなかった。間もなく欧州は戦場と化してしまう。それでも人はいつの時代でも、「数」やその偶然の組み合わせに意味を持たせ、新しい何かを期待しようとするのである。

話はとぶが、今秋当館は、「日本の暦」展を開催する。私もその展示班の一人となった。少しばかり勉強していくうちに、今年は「暦」にとっては容易ならぬ年であることがわかってきた。日本人の手による暦法を初めて採用した貞享改暦から300年。旧暦11月1日が冬至にあたる朔旦冬至は、1938年以来で、次は1995年である。十干十二支が一巡して元に戻る甲子の年。それに惑星一望がこんなに集中しているのも珍しい。こうも重なると、これはもう尋常なことではない。おごそかな気持ちで、準備に勤しまねばならない。それにしても、私は暦の素人である。駆り出される覚が……。いや、ひとつあった。今年是我的干支である。

(一般参考課 村山隆雄)